

学び、考え、行動する人をどう育てるか

ながれ

内藤正明 (ないとう まさあき／認定 NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路 理事)
木田 薫 (きだ かおる／認定 NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路 理事長)

執筆のスタンス

与えられたお題に対しては、「受験のための詰め込み」、「ゆとりのない先生の仕事」等の問題提起が思い浮かぶ。しかし、そのあたりは教育問題の専門家から、現場を踏まえた話があるだろうから、教育（特に初・中等教育）には門外漢の筆者は、少し違った視点から論じてみる。

ということで、ここでは身近な事例を題材に“問題提起”をして、それに専門家からの意見を頂戴するというスタンスで書いてみたいと思う。

取り上げる題材

「学び、考え、行動する若者」と聞いた時、いま一番に思い浮かぶのは“グレタ・トゥンベリ”さんではないか。環境問題の幅広い知識、その意味を深く考えてそれを社会に発信する行動力は驚異というしかない。それはヨーロッパの政界図を動かす可能性さえ感じさせる。そのグレタさんの姿に驚いた大人達は、「誰かの洗脳だろう」、「社会のこともよく知らずにヒステリックに叫んで」などと中傷めいた批判をする。あのトランプも含めて、何人かの元首たちがからかい口調でけなすなど、大人気ないというしかない。

では、当人に会ったこともない筆者が彼女のことを評価する理由は何かと問われるだろうが、それに対する返答こそがこの拙文のキーでもある。それは、年齢、その主張や行動様式がよく似た“我が家のグレタ”を身近に見ていて、その延長線上に本家のグレタさんを類推するからである。当家でも、「あの歳で環境問題に発言をするのは、爺さんの教

育のせいだろう」と言われた。しかし、それは全く当たらない。爺さんは問われたことにヒントを与えたことはあるが、それ以上の教育などは施していない。むしろ専門家ということで半世紀以上もやってきた小生が、答えに窮するようなことが度々ある。あの年代の感性と理解力を侮ってはいけない。

では、どんな勉強をしたのか？

「我が家のグレタ」は、実は小学卒業直前から不登校であった。では勉強はどうしたのか。基本は独学であり、多少の通信とフリースクールでの勉強だけである。それにもかかわらず難しい生態系に関しては、食物連鎖や適者生存を、地球環境問題でもエネルギー保存とエントロピー増大などを、その本質もかなり理解しているようである。

「なぜそんな難しいことを知っているのか？」と尋ねると、「学校に行かず宿題も予習もないのだから、考える時間は十分あるから」と言い返された。それは時間だけの問題ではなく、本人の理解力も認めねばならないと思うが…。

加えて、時間があるので様々なことに自ら取り組む。例えば、作物を育てることに興味があり、そのために堆肥を作るが、その方法を検索しながら、水分と土壌と生育の関係などを試行錯誤しつつ会得している。つまり経験を通して知識を得ている感じである。大工仕事にも関心があり、縁の修理や動物小屋を、設計し、材料を集め、製作するとか、灰と廃油で石鹼を作るなど、ほんの初歩ではあるが「材料学、力学、化学」なども体験から得ているように見える。

それ以外、学校で学習する知識の大半は、今のネット時代では簡単に検索して分かるので、先生より最新情報を知っている。これは大学でも同じで、「水俣病とは…」といった解説をしていると、さっさと検索して後は横を向いている。検索では得られない「問題の背景、将来予測など」を話す時だけ講義を聴いてくれる。ネット時代になって、やっと本来の授業・講義ができる（というより、せざるを得ない）時代がきたのは、先生には大変かもしれないが、結構なことではある。

ひきこもり事例から見えてくるもの

前段で書いたのは、一言でいえば今の学校教育の問題点を、我が家のグレタという少々特異な例を通じて提起したものだが、他の引きこもり事例から見えてくる学校事情を考えてみる。

私たちが設立した「認定 NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路（略称 SODA）」は「誰もが役割のある社会」をめざして、ひきこもり・不登校等の支援に取り組んでいる。その対象の一人、Mさんは、小・中学校でいじめにあい、人目が怖くて15年間も引きこもっていた。それが SODA に出会って仕事をできるようになってから、温かい人たちに「ありがとう」の言葉をたくさんもらって元気になり、今では支える側になることが彼の夢となっている。類似の嬉しい具体例をいくつも紹介したいが、紙数の関係で割愛する。

今、学校へ行かない子、社会へ出られずに籠っている子がたくさんいる。理由は様々だが、共通しているのは、自尊心が希薄で「自分は何の役にも立たない厄介者だ」と思い込んでいることである。しかし、どの子もそれぞれがとて輝くものを持っている。SODA では、絵を描き、木工や瓦細工など色々の作業をするが、その中で繊細で驚くような作品を作る。人との会話は苦手だが、こうした作品を通じて自分を表現する。そのような個性を生かせない社会は、

社会の損失でもある。そもそも「役に立つ」とは何なのかが問われるべき時だろう。

これからの学校を考える

上記のような経験を踏まえて、私たちはいま新たな学校づくりを計画をしている。その基本を、「多様な生き方が選べ、自らその未来を切り開くことができる土台を作る学校」とした。それを支えるために、以下の教育方針を想定している。

「哲学の学習」：“人はどう生きるか、社会はどうあるべきか、なぜ学校に行くのか”といった根本命題を自ら考えられる哲学の学習である。的確で速い理解は、理由を納得してからの勉強である。また、「一人では生きていけない人間という存在」のことを学ぶことも包含したい。

「個性の尊重・育成」：戦前は、「富国強兵」を目指し兵士の教育に徹していた。戦後は産業戦士の育成が目的となったが、その産業が「規格大量生産」を特徴としたので、教育にも「規格」を求めたのだろう。しかし、個性ある企業が活躍する世界の趨勢の中で、ガラパゴス化・ゾンビ化したとされる日本産業を救うためにも、個性ある才能が必要である。

こだわりの強い個性を持った人は、こだわりのモノづくりに適していることが、NPO の作業でも見られる。個性的なモノづくりが求められるこれからは、一人一人の個性を伸ばす教育が大事で、「普通、人並」という基準で評価し、そこからはみ出していると「いじめ」にあうような学校は変えるべきだろう。

「実学からの学びの重視」：我が家のグレタに見るような、自ら興味のある実践から始め、そこで必要になった知識を学ぶ仕組みを作る。必要性を感じて学めばより知識が身に付く。また、言葉に加えて、音楽、絵、身体、造形など様々な手段で自己表現できる場を用意する。